

## 国際協力事業における大学との連携：茨城大学での講義を終えて

先号では静岡大学の学生を対象にしたセミナーを紹介した。引き続き今回は、茨城大学の大学院生を対象にした集中講義について紹介したい。本集中講義は茨城大学農学研究科の生産環境工学特別講義として依頼されたもので、「農業・環境の技術と知識を活用した起業—砂漠化に挑む専門職」というタイトルが与えられた。具体的には、農学・環境学の専門知識を活用して、主に海外の農業開発・環境修復事業に参画する専門職の業態、起業プロセス、留意事項、期待されること等を、実験室～圃場～地域の各レベルおよび社会システムの技術・知識・調査研究姿勢に関連付けて講義することを依頼された。そこで、これまでの国際耕種の経験を生かし、乾燥・半乾燥地の環境の特徴、砂漠化（環境劣化）の現状、環境劣化の自然・社会的要因、砂漠化防止対策の事例紹介を通して、農業と環境の専門職に求められる技術・知識・関わり方を論じることとした。さらに今回は筑波国際センターでの研修業務とも連携させて、以下に示す様な活動を実施した。

集中講義は合計3回に渡って実施し1回目は静岡大学での講義と同様に、乾燥地域の環境と砂漠化の現状さらには資源管理や途上国援助におけるソフト化の流れを説明し、技術協力におけるコンサルタントの役割等についても触れた。2回目は海外での開発調査や国内での研修事業における国際耕種の活動を紹介すると同時に、筑波国際センターにおける研修員との交流会を提案した。3回目は筑波国際センターにおける研修施設及び研修実態を見学した後に、研修員との交流会を実施した。

交流会の進め方については皆で話し合い、学生達がプチコンサルになって研修員達の出身国一般情報の収集を行い、それに基づいて聞き取り調査の演習を実施するという形を考えた。南部アフリカ野菜畑作技術コースの研修員はボツワナ、ナミビア、スワジランド、レソト、ザンビアといった学生達にとって馴染みの薄い国々から参加している。そのため、こうした国々の一般情報特に農業事情について調べることも自体も学生達にとっては興味深いことだったようである。交流会の日の午前中には各国情報の発表会を行い、収集情報の共有を図った。交流会では双方からの簡単な自己紹介の後、グループ討論だと話す人が限られてしまうのではと考え、基本的には学生と研修員が1対1で話し合う体制とした。また、どうにかしてコミュニケーションを図るということを手伝ってもらうために、助け船も最低限にとどめた。

交流会後には、多くの学生が語学力の無さを感じたと答えた。それと同時に、異文化との接触を通して国際化について思いを新たにしたいという声も多かった。そして、何よりも大きな収穫は交流会の最後に「お花見」が話題となり、桜の花が満開となった筑波国際センターで同じメンバーによる「スポーツ大会兼お花見の会」が実現したことである。帰国までに絶対にもう一度みんなで集まろうと張り切っている連中もいる。国際協力の基本は、こうした個人レベルの触れ合いにあると思う。今回の交流会に参加した学生そして研修員に、こうした触れ合いの楽しさや美しさを少しでも感じてもらえれば、国際耕種としては望外の喜びである。同時に、今回のような試みによって国際交流が少しでも促進され、世界中に友達の輪が広がっていくことを心から祈っている。一企業として、このような場を活用しながら国際交流に関わろうとする人材育成に少しでも貢献できる喜びは大きい。最後に、集中講義という形でこうした機会を与えて頂いた茨城大学と小林久助教授、さらには筑波国際センターならびに南部アフリカ諸国より来日中の研修員一同に心から感謝申し上げます。



交流会



記念撮影



お花見